

# 鉢花用サルビア新品種「ミライイエロー」の育成

工藤溪汰\*・服部哲也<sup>a</sup>・浅野 正<sup>b</sup>

<sup>1</sup>岐阜県中山間農業研究所中津川支所 508-0203 中津川市福岡

Breeding new variety of salvia 「MIRAI yellow」 for Potflower

Keita Kudo\*, Tetsuya Hattori<sup>a</sup> and Tadashi Asano<sup>b</sup>

*Gifu Prefectural Research Institute for Agricultural Technology in Hilly and Mountainous Areas,  
Nakatugawa Branch, Hukuoka Nakatugawa, Gifu 508-0203*

## 摘 要

岐阜県中山間研究所中津川支所ではこれまでに国内で初めて鉢花用アキギリの新品種ミライシリーズ3品種を育成した。この育種の過程で得られた系統の中から、他のミライシリーズとは異なる花色を持つ系統を選抜し、この系統から鉢花用サルビア新品種「ミライイエロー（出願番号：第36083号）」を育成した。「ミライイエロー」は上唇弁と下唇弁ともに明橙黄色の単色であり、これまでに育成したミライシリーズの中でも特にコンパクトな草姿である。開花時期は10月上旬であるため、他のミライシリーズ同様に流通アイテムが比較的少ない秋期に出荷できる耐寒性宿根草の鉢花品種であり、ミライシリーズの新たな花色のバリエーションとして今後の普及が期待される。

**キーワード：**アキギリ、キバナアキギリ、宿根草、ミライシリーズ

## 品種開発の背景

岐阜県は2021年度の生産量において、愛知県、埼玉県、静岡県に次ぐ鉢物花き類の生産地である。県内の鉢花産地の中でも標高の高い地域では、夏期の冷涼な気候を活かし、冬季にシクラメン、夏季にランなどを出荷している。しかし、秋の園芸シーズンに出荷できる品目が少ないため、秋咲性のある新たなオリジナル品目の開発が切望されていた。

このため、中山間農業研究所中津川支所（岐阜県中津川市福岡、以下、中津川支所）では、2015年から県内の山間地域にも自生が見られるサルビア属のアキギリ（*Salvia glabrescens* Makino）に着目し育種に着手し、これまでにアキギリとキバナアキギリの交雑により、鉢花用サルビア新品種「ミライパープル（出願番号：第34576号）」、「ミライブルー（出願

番号：第34577号）」、「ミライピンク（出願番号：第34578号）」のミライシリーズ3品種を育成した。

「ミライパープル」は、白と紫の鮮やかなバイカラー、「ミライピンク」は白とピンクのバイカラー、「ミライブルー」は、淡い青紫の花色が特徴で、前2品種と比較してより矮性である（浅野，2021）。

花きの新品種では、花弁の色など特徴が異なる品種を複数展開することで、市場価値を上げることができる。そこで、これまでに育成したミライシリーズ3品種とは異なる花弁色を持つアキギリの育成が切望されていた。

先の品種の育種親としたサルビア属アキギリ（*Salvia glabrescens* Makino）は、山間地域に生息する多年草で、草丈20～50cm程度で花色は紫単色であり、中部、近畿、中国地方の温帯に分布している（北村ら，1957）。また、同じく育種親としたキバナアキギリ（*Salvia nipponica* Miq.）は、本州、四国、九州の温帯から暖帯に分布し、草丈20～40cmとアキギリ族の中でも小さく、花色は少々赤みがかかった黄色である（牧野ら，1961）。そこで、育成した3品

\* Corresponding author. E-mail: kudo-keita@pref.gifu.lg.jp

<sup>a</sup> 現在：岐阜県農政課農産園芸課

<sup>b</sup> 現在：退職

種とは花色が大きく異なるキバナアキギリに着目し、より矮小で、かつ花序を多く発生させ、より多く花をつけるものを選抜することで豪華な外見の優れた鉢花新品種の開発を目指した。

**育成経過**

2016年に中津川支所において、キバナアキギリの自殖により10粒の種子を得た。得られた種子を播種し、その中から節間が詰まっており、分枝が盛んでコンパクトな草姿を持つものを2個体選抜した。この2個体のうち、より分枝が盛んで、より草姿がコンパクトで、かつ挿し芽による増殖率が高い1個体を「東濃アキ5号」として生育特性を調査した結果、これまでのミライシリーズと同様に枯死する株や未開花となる株がなく栽培ロスが少ないことを確認したため、2022年3月16日に種苗法に基づく品種登録を出願し、2022年9月28日に出願公表(出願番号:第36083号)された。本品種はこれまで公表してきた3種類のミライシリーズに新しい花色のバリエーションをもたらす品種として位置づけるため「ミライイエロー」と命名した(図1)。

**品種の特徴**

中津川支所の硬質ビニールハウス温室内にて、2021年4月30日に挿し木、5月21日に3.5号ポットに仮植、7月6日に5号底面給水鉢に鉢上げし、以降底面給水にて栽培した。同年秋の開花日における特性を、農林水産植物種類別審査基準(サルビア属)に従って調査した。また、比較品種として岐阜県のサルビア属の既登録品種「フェニックスパープル」および「ミライブルー」を同作型、同条件で栽培し比較を行った。ここに記した開花期については、開花しているが落花までは至っていない時期(鑑賞の最盛期)とした。

開花期は、「ミライイエロー」が9月28日の一期咲性、類似品種の「フェニックスパープル」は開花が連続的であるため開花期の判別ができず、「ミライブルー」は9月20日の一期咲性であった。草丈は「フェニックスパープル」が62.0cm、「ミライブルー」が52.0cmであったのに対し、「ミライイエロー」は44.9cmと、対象品種に比べて低い(表1)。花色は、「ミライイエロー」が上唇弁と下唇弁とともに明橙黄色の淡色であり、「フェニックスパープル」(上唇弁と下唇弁とともに濃紫色の単色)、「ミライブルー」(上唇弁がピンク白色で下唇弁が浅紫色)とは花色が異なる(図2、表1)。また、「ミライブルー」と同様に「ミライイエロー」も花序数、花数が多いため外観が優れている(図3)。

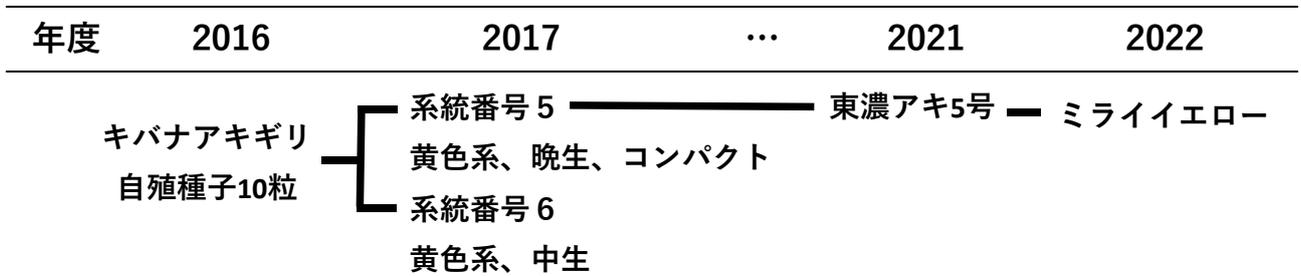


図1 「ミライイエロー」の育成経過

表1 開花期調査(2021年)

(n=10)

品種名	開花期 (月.日)	草丈 (cm)	株幅 (cm)	花序長 (cm)	花冠長 (mm)	花冠筒部長 (mm)	花冠高 (mm)	下唇弁幅 (mm)	花冠筒部の 主な色	上唇弁の 主な色	下唇弁の 主な色
ミライイエロー	9.28	44.9	53.6	14.4	3.6	1.8	1.9	1.6	明橙黄(2204*)	明橙黄(2204*)	明橙黄(2204*)
フェニックスパープル	連続的	62.0	56.9	11.4	4.8	3.1	1.6	1.2	濃紫(8608*)	濃紫(8608*)	濃紫(8608*)
ミライブルー	9.20	52.0	55.3	19.5	3.1	1.8	1.9	1.5	黄白(2701*)	ピンク白(9201*)	浅紫(8603*)

\* 日本園芸植物標準色票による



図2 花卉の色の比較

上：ミライイエロー 中：ミライブルー 下：フェニックスパープル



図3「ミライイエロー」と比較品種の草姿

左：ミライイエロー 中：ミライブルー 右：フェニックスパープル

### 今後の方向性

「ミライイエロー」は、これまでに育成したミライシリーズと同じく親にキバナアキギリを使用している。キバナアキギリはアキギリ族の植物の中でも草丈が低く、さらに草丈の低い個体を選抜したことで鉢花としての利用に適する。また、花序の多さや1本の花序につく花の数が多いため、外見が華やかである。加えて、「ミライイエロー」の花色は、ミライシリーズにはない黄色であるためバリエーションが広がり、市場でのブランド価値の向上に繋がることが期待される。

一方、アキギリはもともと山地に自生する植物であるため、屋内での鉢花としての利用にとどまらず屋外環境での生育も十分に可能であると考えられることから、花壇などでの栽培も期待できる。近年、ガーデニングブームで花壇苗の需要は増えており、春季に比べアイテムの少ない秋季用に出荷できればさ

らに本種の需要を増加できると考える。

今後は、花壇苗として利用する際の越冬性や耐寒性などについて検証を進めるとともに、アキギリはまだ消費者の認知度が低い品目であるため、積極的にPRしていく必要があると考える。

### 謝辞

本育成を実施するにあたり、現地実証試験にご協力いただいた県内鉢花生産者と農政部農業経営課、交配に用いた種苗の提供や品種登録指導をいただいた県農業技術センター花き部、アキギリ栽培の助言をいただいた水戸市植物公園園長の西川綾子様には深く感謝を申し上げます。

### 引用文献

浅野 正. 2021. 鉢花用サルビア新品種「ミライ」シ

リーズ3品種の育成. 岐阜中農研報. 第16号：1-

7. 北村四郎・村田 源・堀 勝. 1957. 原色日

本植物図鑑

草本編（上）：166-169.

牧野富太郎・牧野 新. 1961. 日本植物図鑑草本編

（上）：532